

A Study on Child Care Support to Parents at Daycare Center : Analysis of a Daily Class Report

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): day care center, parenting support, Class reports, child care support 作成者: 柴崎, 正行, 会森, 恵美 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6355

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育所における保護者支援についての検討 ―「クラスだより」の分析を通して―

柴崎正行¹⁾・会森恵美²⁾

¹⁾大妻女子大学家政学部児童学科, ²⁾東京こども専門学校

A Study on Child Care Support to Parents at Daycare Center ― Analysis of a Daily Class Report ―

Masayuki Shibazaki and Emi Emori

Key Words: 保育所 (day care center), 保護者支援 (parenting support), クラスだより (Class reports), 子育て支援 (child care support)

1. 要旨

2015 年 3 月に子ども・子育て支援新制度がスタートし、子育て支援という言葉は社会に広く使われるようになった。保育所では平成 11 年版保育所保育指針の頃から子育て支援が求められるようになり、その為に新しい事業を始めるところが多かったが、そもそも保育所は共働き家庭の子育てを支援するという側面が強い施設である。

本稿は保育所で毎日発行されたクラスだよりに焦点を当て、日々の保育の中で発行されたクラスだよりが保護者支援になるのか、について検討した。

クラスだよりと、保護者が書いた連絡帳を合わせて分析した結果、クラスだよりは保護者支援に効果的なツールであることが示唆された。保護者が子どもたちの日々の生活や遊び、成長の姿などが書かれたクラスだよりを読むことは、保育者の目を通して見た自分の子どもやクラスの子どもの姿を知ることになる。そのことは保護者の「子どもを見る目」を豊かにしていく可能性を示しているといえた。

2. 問題と目的

地域のつながりが薄くなり保護者の育児不安が顕在化した、子どもの数が減少したこと子どもも大人も乳幼児と接する機会が減った、などの社会状況から、子育て支援は少子化対策を越えて大きな意味を持つようになってきている。そして、子育てについての様々なノウハウが蓄積している保育所は子育て支援に大きな期待を寄せられるようになった。

そのために「子育て支援」という言葉は平成 2 年頃から使われ始め、その頃東京都の公立保育所でも園庭開放や給食の試食、看護師らによる身体計測などの子育て支援事業を行うようになった。その後、平成 20 年の保育所保育指針には保護者支援がはっきりと打ち出され、児童福祉法でも保育士の業務として児童の保育と共に保護者支援が明記された。

一方で大場は、こうして制度化された子育て支援の事業を、現場の保育者にとっての「上から下ろされてくる事業¹⁾」と表現し、現場保育者の声が反映されていないのではないかと危機感を持っていた。

保育所の成り立ちを考えると、保育所はもともと共働き家庭の仕事と子育ての両立支援としての役割を求められ、システムとしての保育所が子育てを支える一助になっていたことは明らかである。また、保育者と保護者の間で何気なく交わされているやりとりや子育ての相談は、あらためて「子育て支援」「保護者支援」と言われる以前から行われてきた。

では保育所の保育実践そのものはどうなのだろうか。日々の保育を通して子どもが育っていくこと、安心して毎日園に子どもを送り出せること、それが「子育てを支えること」になる、と考えることはできないだろうか。しかし保育そのものを「保護者支援」の観点から分析していくことは難しい。

そこで本稿は保育所で日常的に発行されていた「クラスだより」に着目した。「クラスだより」などの通信は平成 20 年版の保育所保育指針に保護者支援のツールとして明記されている。そこには子どもたちの様々な姿が保育者の目を通して書かれている。この「クラスだより」で保育者が保護者に伝え

ようとしていたことは何か、それは「保護者支援」の役割を果たしていたのか、に焦点を当てて分析・検討を行った。そして「クラスだより」の意義を明らかにし、保育現場における「保護者支援」とは何をすることなのかについて考察する。

なお、本稿における「保護者支援」とは「親を子育ての主体者として位置づけ、保育者が日常の保育を通して親が安心して子育てをしながら親として成長することを支え、同時にこどもの健やかな成長を促すもの」と定義する。

※「子育て支援」と「保護者支援」

地域の在宅子育て家庭に対する「子育て支援」と子どもが保育所に入所する保護者に対する「保護者支援」を分けて明記したのは平成 20 年版の保育所保育指針である。分析対象のクラスだよりは保育所に入所する子どもの保護者に配布されているので、本稿では「保護者支援」という言葉を用いる。

3. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象

① 「くじらだより」

公立保育所年長クラスで平成 X 年度に発行されたクラスだよりを分析の対象にした。土日を除くほぼ毎日発行され、行事のお知らせなどを除いて年間 240 枚発行された。そのうち、当該クラスの保護者が家庭で保管していた 185 枚が分析対象になった。(65 枚が欠損している。)

② 連絡帳

当該クラスの在園児 M の保護者と担任のやり取りが記された 1 年分の連絡帳 4 冊。子どもが登園した日には保護者によって必ず記入がされていた。

(2) 研究の方法

当該クラスの年間保育計画が 1 年を I 期 4～5 月、II 期 6～8 月、III 期 9～12 月、IV 期 1～3 月の 4 期に分けていたのに倣い、「くじらだより」も同様に 4 期に分けた。それぞれの期で“保育者は保護者に何を伝えたかったのか”という点に焦点を当てて KJ 法を使って分析した。その際、KJ 法の考案者である川喜田の手法・考え方に沿うよう努めた。

連絡帳は「くじらだより」の記述に保護者が応答的にコメントを書いた部分を中心に時系列で整理した。そして「くじらだより」の分析からわかったことと保護者のコメントを対照させ、「くじらだより」が保護者に伝えたことは何か、それが「保護者支援」としてどのような役割を果たしていたのかを検

討し、クラスだよりの意義を考察した。さらにその上で保育所における「保護者支援」についても考察した。

(3) 倫理に関する配慮

連絡帳の取り扱いについては保育学会の倫理要綱に則り、M の保護者に、研究以外の目的で使用しないこと、個人を特定しない範囲で研究に使用すること、の了解を得た。

4. 分析の結果と考察

(1) 「くじらだより」と保育日数の比較分析

保護者が保管していた「くじらだより」の枚数と保育日数を比較するため、それらを表 1 のように期ごとにまとめた。

各期の「くじらだより」から読み取れたことを以下にまとめる。

① 発行されたすべての「くじらだより」のうち、保護者がどれくらいの割合の「くじらだより」を保管していたかを見るために、保育日数と分析する「くじらだより」を比較したところ、I 期約 8 割、II 期約 6 割、III 期約 7 割、IV 期約 9 割であった。I 期、III 期、IV 期に大きな差はないが、II 期は他期より少ない割合となっている。これは夏休みがあり、子どもの欠席があること、合同保育で他クラスの担任が「くじらだより」を書き、分析対象から外したことの影響であると考えられる。

② 保護者が保管していた「くじらだより」の数は III 期が最も多いが、III 期は保育日数が他期より多くなっている影響がある。一方 IV 期は枚数は III 期より少ないが、保育日数 58 日に対し残っている「くじらだより」は 53 日分であり、保育日数との差は 5 日分である。現存しない「くじらだより」5 日

表 1 各期の「くじらだより」の枚数と保育日数

	保育日数 ^{※1}	分析する 「くじらだより」
I 期 (4～5 月)	42 日	34 日分
II 期 (6～8 月)	65 日	37 日分
III 期 (9～12 月)	80 日	61 日分
IV 期 (1～3 月)	58 日	53 日分
合計	245 日	185 日分

※1 年間保育所開所日 294 日のうち土曜日を除く日数

分のうち3日分は卒園式、遠足、年度最終日で「くじらだより」は発行されておらず、保護者が保管していなかった「くじらだより」は2日分となる。これは他期に比べ、際立って少ない枚数といっていだろう。このことは、1年近く「くじらだより」を読み続けた保護者が、クラスへの愛着や子どもたち、保育者への共感の気持ちを強くしていったことを示すと考えられる。

(2) KJ法による図の作成とラベルに基づく「くじらだより」のメッセージ分析と考察

ここではKJ法により作成された空間配置図と共にKJ法で作成された「ラベル」^{注1}を“保育者は保護者に何を伝えたかったのか”に焦点を当てて期ごとにまとめ、各期の特徴を抽出した。

注1: 川喜田は分析の対象をカード化し、そのカードの内容を一言で表す言葉を「一行見出し」とした。その「一行見出し」を「表札」と呼んでいるが、「表札」という言葉は現代には耳馴れないので、本稿では便宜上「表札」を「ラベル」に言い換える。

I 期の特徴

① 「子どもたちが保育所でどのように過ごしているか知ってほしい」という項目の記載数が最も多い。これは新年度になり保護者に「子どもたちの姿を知ってほしい、知らせたい」という保育者の気持ちが強かったことを示している。

② その中でも保護者にもわかりやすい成長の姿や落ち着いて過ごす姿が多い。また、子ども同士、子どもと保育者が戸外で遊ぶ姿の記述も多い。このことは保護者に安心してほしい、保護者との信頼関係を築きたいと考えていた保育者の思いが表れているといえる。

③ 保育者が問題だと捉える子どもの姿の記述について、家庭に対する要求ではなく、保育者の園での対応を伝えている。家庭と園で情報を共有しながら子どもを育てていきたいと考えていたと思われる。

④ 保育者の感情を書くことで思いを伝えようとする記述も見られるが、これはⅡ期以降も見られる。

⑤ 保育者の（大人）意向と子どもの気持ちが必ずしも一致しない場面は、保育の場だけでなく家庭でも起こりうる。そのような場面を時にはユーモラスに伝えており、そのことは家庭での、親子のやりとりにも余裕をもたらす可能性がある。

Ⅱ 期の特徴

① 「子どもが持っている楽しさを伝えたい」という配慮の項目が最も多く、中でも子どもたちの姿に保育者の気持ちがプラスの感情に動いた記述が多い。これは保育者と子どもの関係性が緊張感を含むものから安心感や信頼感を含むものに変化したことを示しているといえる。

② 保育者と子どもの気持ちが一致しない項目で子どもがはっきりと「ノー」の意志表示をしている記述がみられる。このことは子どもが保育者に何を言っても大丈夫という安心感を持ったことを表すと考えられる。

③ 「子どもたちが園でどのように過ごしているか知ってほしい」は、Ⅰ期はそれ自体が目的であったが、Ⅱ期以降は園での出来事を家庭で課題にするなどして、親子で楽しく過ごしてほしいための手段になっている。保育者は家庭での時間を大事にしてほしいと考えていたことがわかる。

④ Ⅰ期はわかりやすい成長の姿が多かったが、Ⅱ期はクラス集団としての内面的な成長を記述したものも多く見られる。

Ⅲ 期の特徴

① 子ども同士のつながりを大切にしたいと考えている記述が多い。これはⅠ期Ⅱ期にはそのようなことを考えていなかった、というのではなく、Ⅲ期にそのような姿が多く見られたということの意味し、子どもたちの大きな成長といえる。

② クラスが落ち着かない姿を見せている記述はⅠ期よりも率直に書かれている。保育者が保護者との信頼関係に自信をもてるようになった表れであるといえる。

③ 保育者が子どもの意見を軽く受け流す場面の記述がみられる。これは子どもと保育者の間に信頼関係があることに加え、子どもと保育者が対等の関係であるからこそできる対応である。

④ 保育者は家庭での時間を大事にしてほしいと考えていた記述も多い。

Ⅳ 期の特徴

① 最も多く書かれているのは成長している姿であり、その中で子どもたちが張り切って活動するなどの生き生きと過ごす姿が多く書かれている。

② 落ち着いている姿はⅠ期にもみられるが、Ⅰ期は保護者と信頼関係を作りたいという意図のもとに書かれているのに対し、Ⅳ期は保護者に伝えたい姿になっている。

③ 就学に向けた記述は多くないが、落ち着いて

過ごしている姿の記述が多い。このことが保護者の就学への不安を和らげるといえる。

④ 保育者は家庭での時間を大切にしたい、と考えていたといえる。保護者にも経験があると思われるあそびの記述もその表れであると考えられる。

(3) メッセージ分析による期の特徴のまとめ

① I期、III期、IV期に最も多く書かれた項目は、「子どもが園でどのように過ごしているか知ってほしい」である。II期は、「子どもが持っている楽しさを伝えたい」項目が多く、子どもたちの姿をプラスの感情を表す言葉を付して記述している。このことはI期からII期にかけて保育者と子どもたちの関係が緊張感を含むものから安心・信頼感を含むものに変わってきたことを示唆しているといえる。

② I期は成長をわかりやすい姿で伝えることが多く、II期は子どもたちの内面的な成長を記している。またI期とIII期、IV期の「成長」の質には違いがみられた。

③ そして成長したのは子どもだけでなく、保育者と子どもの関係性そのものが成長していった、と捉えることができた。

④ I期では保育者が手を焼く場面が時にはユーモアを交えて書かれ、III期ではケンカ等の場面がそのまま書かれている。このことは保護者と保育者の関係も成長していったことを示唆している。

(4) 連絡帳との関連における考察

a. 連絡帳の期のまとめ

以下に連絡帳における保護者の記述を「くじらだより」と応答があると思われる部分を中心に期ごとにまとめ、各期の特徴を抽出した。

I期のまとめ

① 保護者が「くじらだより」を子どもに読んで聞かせると、子どもがその時の様子を話したとの記述がある。「くじらだより」の記述に加えて子どもが自分自身の言葉で楽しかった様子を語るとき、保護者はほっと安心すると思われる。

② 「くじらだより」の、遠出の散歩を予定していたがケンカが多く最も近い公園で遊ぶことになったという記述に対し、保護者は、あなたはどうかだったのかと子どもに問いかけた記述がある。保護者は「我が子はどのようなだろう」と関心を我が子に向けると同時にクラス全体の様子をとらえている。

II期のまとめ

① I期に続き「くじらだより」に書かれていることが親子の会話になっている様子が書かれている

が、I期に比べると出来事だけでなく、保育者が子どもたちに問いかけた言葉を取り上げるなど、エピソードなどのわかりやすい場面への共感だけでなく、保育者の言葉や話に興味関心を示している。

② プールや運動会の練習の場面でわが子の関心が周囲の友だちに広がっていることを取り上げている。それに伴い、保護者もクラスの子どもたち全体に関心を寄せる記述になっている。これは保護者の子どもをとらえる視点が、我が子だけでなく、クラスの子どもたち全体に大きく開かれていることを示している。

③ 「くじらだより」に書かれているクラス全体の活動に関連して保護者は前年度の我が子の姿と比較し、その成長を連絡帳に記している。「くじらだより」が子どもの成長した姿を確認するきっかけになっているといえる。

III期のまとめ

① 運動会などの行事を通して我が子の成長を喜ぶと同時にクラスの他の子どもたちの成長を喜ぶ記述がみられる。

② 行事の話し合いが行われた記述に関連し、我が子がどのようにそこに関わったのかを子どもとの会話で知り、成長を感じている。保護者がクラス全体の姿を「くじらだより」で把握し、子どもの成長をその流れの中で確認しているといえる。

③ ままごと用玩具がすべて割れてしまったことは「くじらだより」にエピソードとして記載され、子どもたちはこのように育つのが望ましい、との文言はないが、自分たち（保育者）はこう考える、ということを書かれている。それについて家庭で話をしてほしいとは書かれていない。しかし保護者は家庭で話題にしている。

IV期のまとめ

① 連絡帳の内容が「くじらだより」に記載されているものがIV期は他期に比べて圧倒的に多く、「くじらだより」の現存率も高い。「くじらだより」の記述が頻繁に親子の話題になるということは、保護者と保育者が同じような思いや興味・関心を持つ傾向にあることを示しているといえる。

② 卒園を間近に控え、1年間のクラス全体の子どもたちの成長に触れ、「淋しい気持ちになった」と書かれている。おそらく保育者の気持ちとほぼ同じである。

③ 我が子が保育園での活動（縫いさし、文集の題名を決めるなど）に対して張り切っている様子が繰り返し書かれている。これは後述する藤崎が「こ

んなにも子どもたちが園生活を家庭に持ち込む²⁾と述べたことを裏付けている、といえる。

b. 連絡帳との関連における考察

① 保護者との信頼関係を築きたいという保育者の意図は伝わっている、と考えてよい。

② I 期から IV 期を通し、保護者は保育所と共にクラス全体の成長を喜んでいる。保護者は「くじらだより」を通して、「集団の中で我が子を見るまなざし」と「我が子以外の子どもたちを見るまなざし」という二つの視点を持つようになった、といえる。

③ 「くじらだより」の記述に対し、保護者が共感的なコメントを書いていた。このことは、保護者は「保育者と同じまなざし」を持つようになっていた、と考えられる。

5. 総合考察

(1) 「保護者支援」としての「くじらだより」の意義

「くじらだより」を本研究における「保護者支援」の定義の視点で考察した。保育者の目を通して子どもたちの姿を知らせることで、保護者は保育者のメッセージを受けとめ、共に喜んだり残念がったりして保育者と思いを共有していた。そのことによって保護者と保育者の信頼関係を築くことができ、保護者は安心して保育所に子どもを通わせることができる。さらに、保育者のメッセージを通して、親としての成長のひとつである、保護者の子どもを見るまなざしが重層的になっていくことを助けていた。したがって、「くじらだより」は「保護者支援」としての機能を果たしていた、ということができる。

(2) クラスだよりの意義

「くじらだより」にはこどもの成長の姿、保育者の意図や気持ちなど、様々な内容が記載されており、これは、行事などの前にだけ発行されるクラスだよりでは掲載し切れない内容といえる。つまり、日々の保育の場面が保育者の目を通して記述されていたということが、「保護者支援」としてのクラスだよりの重要な点であるといえる。

(3) 保育所における「保護者支援」についての検討

大場 (2007)³⁾ は、子どもや保護者が保育者を信頼することだけでも「子育て支援」になると述べている。また、藤崎 (2009) は幼稚園 3 歳クラス入園児の保護者に質問紙調査をし、子どもたちが園生

活を家庭に持ち込むことを明らかにした。そして「このことを踏まえると、本来得意である子どもへのかかわりを充実させることで、ひいては保護者への支援もできる⁴⁾」と述べている。大場、藤崎共に、保護者支援において保育そのものを大切にしていけることが大事な課題であることを指摘している。

6. 結論

「くじらだより」は、保育の中で生起する子どもたちの様々な姿を保育者の目を通して伝え、保護者はそのメッセージを受け止めて、保育者と共に喜んだり残念がったりして思いを共有していた。それらのことは、「保護者支援」の目的の一つである“親が安心して子育てすること”を助け、“親としての成長”に必要な“子どもを見るまなざし”を重層的にしていくともいえた。また、子どもや保護者が保育者を信頼するという保育そのものが「子育て支援」になるともいえる。

したがって保育所における「保護者支援」は、日常的な保育そのものを大切にしていけることが大事な課題であり、子どもたちの様々な姿や保育者の思いなどを保育の中での姿を通して伝えることで、親としての成長を助けていくことが重要となる。そのツールとして日常の子どもたちの姿や保育者の思いを伝えるクラスだよりは有効である、ということができる。

7. 今後の課題

保護者が「くじらだより」を読んでどのように受け止め考えていたかについて、今回は連絡帳の分析から考察したが、今後インタビューを含めた詳細な追跡調査が必要である。また、今回は 1 つの家庭で保管されていた連絡帳との比較分析であり、さらに多くの連絡帳や保護者へのインタビューが必要である。

引用文献

- 1) 大場幸夫 (2002) 「子育て支援」における保育者の主導権 (ヘゲモニー) を問う. 保育の実践と研究. vol 6. no. 4. p 25
- 2) 藤崎春代 (2009) 子どもの園生活と保護者の発達. 発達 118. ミネルヴァ書房. p 64
- 3) 大場幸夫 (2007) こどもの傍らにあることの意味

- 味, 萌文書林, p 46
4) 前掲 2

参考文献

- OECD 編著 (2011) OECD 保育白書 人生の始まりこそ力強く, 星三和子他訳, 明石書店, 174
- 網野武博 (1999) 第 7 章保育所における子育て支援及び職員の研修など 1. 子育て支援及び職員の研修等の必要性, 社会福祉法人 日本保育協会 (編), 保育所保育指針の解説, 社会福祉法人 日本保育協会
- 泉千勢 (1994) 新「保育指針」と保育の課題, 社会問題研究
- 大豆生田啓友 (2006) 支え合い・育ちあいの子育て支援, 関東学院大学出版会
- 大豆生田啓友 (2008), 子育て支援とは何か: 子育て支援の多様性, 大豆生田啓友他 (編) よくわかる子育て支援・家族援助論, (2), ミネルヴァ書房
- 太田光洋 (2002) 「子育て支援」とは何か, 望月威征編, 保育の実践と研究 6 (4)
- 大場幸夫 (2002) 保育所のこれまでとこれから—子育て支援は新しい課題なのか—, 保育の実践と研究 7 (1), スペース新社
- 大日方真史 (2008) 教師・保護者間対話の成立と公共性の再構築—学級通信の事例研究を通じて—, 教育学研究 75 (4) 日本教育学会
- 柏女霊峰 (2003) 子育て支援と保育者の役割, フレーベル館
- 柏女霊峰 改定, 保育所保育指針・幼稚園教育要領を考える! 4. 新保育指針, (新教育要領) の特徴とこれからの課題を考える (2) 保育所の社会的責任の明確化 <http://www.hoiku-support.jp/topics/post-2/> (情報取得 2012.1.14)
- 川喜田二郎 (1970) 続・発想法, 中公新書
- 剣持安里他 (2005) 保育者と保護者の連携—0 歳児～2 歳児の連絡帳のメッセージ分析を通して—, 山梨学院短期大学研究紀要
- 厚生省 (編) (1991) 厚生白書 (平成 2 年版) (1991) ぎょうせい
- 厚生労働省 (編) (2008) 保育所保育指針平成 20 年告示 フレーベル館
- 齋藤克子 (2007) 子育て支援施策の変遷～1990 年以降の子育て支援施策を中心として～, 京都女子大学現代社会研究科 現代社会研究科論集
- 霜村三二 (2006) らぶれたあ—愛と安心をつなぐ教室からのたより—, かもがわ出版
- 杉本裕子・内藤知美 (2009) 幼稚園における保護者成長支援システムの構築に関する研究—保護者の成長過程を組み入れた教育課程の編成, 鎌倉女子大学学術研究所報, 第 9 号
- 高橋光幸・小黒美月 (2011) 「クラスだより」で響き合う保育～子どもと親と保育者でつながるしあわせ～, かもがわ出版
- 田中幸風・三宅茂夫 (2001) 園だよりにみられる教育メッセージ分析, 学校教育学研究 13, 99-107
- 友定啓子 (2007) 幼稚園における保護者の成長支援, 保育学研究 45 (2)
- 牧野カツコ (1985) 乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連, 家庭教育研究所紀要 6
- 待井和江 (1999) 保育所保育指針改訂の課題と保育士養成, 社会問題研究 48 (2)
- 吉長真子 (2008) 日本における＜子育ての社会化＞の問題構造—教育と福祉を貫く視点から—, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室研究紀要 34
- 渡辺桜 (2005) 家庭と園の相互支援につながる保育通信のあり方についての考察, 愛知教育大学幼児教育研究
- 渡辺英則 (2009) 保護者を巻き込む記録, 保育学研究 47 (2)

Summary

The purpose of this study is to clarify the meaning of child care support provided to parents at daycare centers, focusing on the daily class reports issued by the author as a childcare giver and her colleague to the parents at a daycare center. The daily class reports described various scenes of the children's life at the daycare center and their growth through the caregivers' eyes. The caregivers intended to provide their different views and ideas on the children to parents through the daily reports. Communication notebooks between caregivers and parents indicated that the parents could understand the caregivers' messages and also share their own views on children. Generally, the parents tended to focus on their own children but over time also became interested in the other children at the day care center through the daily class reports. The results suggested that the daily class reports could help to broaden the parents' ideas about children. Multiple views toward children are very important for parents to raise their own children. The results suggest that a daily class report is a very effective tool to support parents and it would contribute to building a trustful relationship between parents and caregivers at daycare centers.